

# 豊かな自然を守る

## 全域が特別天然記念物 山口・周南市八代地区

本州で唯一ナベツルが飛来する山口県周南市八代地区。「八代のツルおよびその渡来地」として、全域が特別天然記念物に指定されている。ツルが舞い降りる豊かな自然環境維持に一役買っているのが、農つるの里（森次高志代表理事・43）と、女性3人で始めた里山再生グループ、やしろの杜を楽しむ会（手島みゆき会長・46）だ。それぞれが地域の農地維持と山の荒廃防止に貢献している。

山あい田が広がる八代地区。写る圃場の多くがファームつるの里の耕作地



### 地域の農地を維持 ファームつるの里

ファームつるの里は、ツルにも優しい環境保全型農業推進のため、2006年に設立された。24年度時点で、地区の東部を中心に約52・3ヘクタールで水稲や麦、大豆を生産する。耕作する農地は、全て農地中間管理機構を

通じた利用権設定により貸借。組合員69人の農地を引き受け、耕作面積は毎年1〜2ヘクタール増えている。県の認証基準に沿って環境に配慮した栽培に取り組み、米と大豆の一部で、山口県が認証する「エコやまぐち農産物」

の認証基準に沿って栽培を実践している。同認証には、化学農薬・化学農薬を使わず栽培する農産物である「エコ100」と、化学農薬・化学農薬の使用を県の定める基準の50%以下とする農産物の「エコ50」の2種類がある。同社は、エコ100コシヒカリを2・7ヘクタール、エコ50コシヒカリ7ヘクタール、エコ50ひとめ

ぼれ12ヘクタール、エコ50大豆10ヘクタールを栽培する。また、耕作地のうち2・7ヘクタールは、ツルの餌場にもなるようにこの思いから、冬の間も田に水を張ったままにする「冬期湛水」を実施する。訪れたツルは家族単位でなわばりを作り、田に落ちたモミ、麦や生息するトシヨウ、タニシなどを食べて過ごすため、豊かな生態系を生み出せる。冬期湛水は有効だ。今後実施面積を2〜3ヘクタール増やしたいと考えている。同社では、森次さんを合わせた4代、5代の6人が農作業にあたる。総枚数380枚にもおよぶ農地を適切に管理するためには、現場の「人」も大事にしなければ成り立たない。

ファームつるの里の社員の皆さん（同社提供）

### 福利厚生充実、毎年昇給

09年に同社に就職し、22年に代表に就任した森次さんは、福利厚生の充実を自ら声を上げ実現させてきた。シフト制による週休2日の確保はもちろん、フレックス制度を導入し農繁期を除き出退勤時間を自由に調整できるようにしている。育児休業も、自身が2年取得し実績を作った。

また、毎年の昇給を従業員に約束している。そのためにも、さらに耕作面積を増やすなどして

## ツルにも優しい環境保全型 「餌場」と冬期湛水も実施



米は「つるの里米」として商標登録。地元酒造会社や加工場と提携し、日本酒やおかき、玄米なども製造（同社提供）

収益を上げる必要もあるが、森次さんは「引き受ける面積が増えても、やり方次第で今の人数でもやれる」と自信を見せ、さらなる業務効率化を検

田に滞在するナベツル

# ナベヅルが飛来する豊かな自然



## 山の荒廃を防止 やしろの杜を楽しむ会

やしろの杜を楽しむ会は、元々里山整備に関心があった手島さんが、同じく地区内で興味を持っていた柴田智子さんと森次絵梨さんを誘い24年から活動を始めた。普段は月に1回ほど山に入り整備

生を含む総勢15人が県内外から訪れた。会では、造園技師の矢野智徳さんが「大地の再生」と名付け実践する環境再生手法を取り入れた里山整備を行う。当日は

田に滞在するナベヅル (周南市提供)

米は「ころの里米」として商標登録。地元酒造会社や加工場と提携し、日本酒やおかき、玄米みそなども製造 (同社提供)

はツルが訪れる環境へとつながる好循環が生まれつつある。

た。また、毎年の昇給を従業員に約束している。そのためには、さらに耕作面積を増やすなどして収益を上げる必要もあるが、森次さんは「引き受ける面積が増えても、やり方次第で今の人数でもやれる」と自信を見せ、さらなる業務効率化を検討する姿勢だ。

同会の活動は、(公社)国土緑化推進機構が実施する「みどりと水の森林ファンド」の公募事業に採択され、助成を受け行われている。

## ツルが来る環境へと好循環

### 希望者を募り「大地の再生」

を行っている。6月13日、外部からも希望者を募り2回目の「大地の再生講座」が開かれた。ファームつるの里の社員も森次さんを筆頭に3人が参加し、中学

大地の再生結の杜づくり中国支部から講師を招き、指導を受けながら整備していた。

#### かなたでも挑戦できる

回手法による草刈りや

どもや女性でも挑戦できる。

やしろの杜を楽しむ会が整備した山から流れ出る水は、農業用水として使われ農産物生産の一助となる。里山の整備が営農を助け、ひいて



鎌を手に雑草を刈り取る



①参加者に会の趣旨を説明する手島さん、②水の通り道を確認する参加者

### 今年は何羽? 楽しみに待つ

ナベヅルは、秋から春先にかけて、シベリアから寒さを避けるため渡来して越冬し、暖かくなること戻っていく。直近では、昨年10月31日に7羽が訪れ冬を越し、今年3月29日に立ち去った。

森次さんによれば、ナベヅルが帰る際は、別れ

のあいさつをするかのように頭上をしばらく旋回して飛び去るためすぐに分かるという。

地区では、ファームつるの里ややしろの杜を楽しむ会だけでなく、ツルの餌場やなぐらの整備を行う「八代のツルを愛する会」などの団体も活動している。

今年は何羽のナベヅルがやって来るか。地区の皆がその訪れを待つ。